



理事会だより（3・13）

一、定期総会議案書案につき各部より説明し4月理事會にて検討する。

二、梅まつり俳句大会の会計報告。（会計部）

三、協会報郵送取扱いの郵送料改定について2月理事會決定に基づき説明文を3月号協会報に同封配布。

（総務部）

四、協会報が7年11月号で七〇〇号に達することに鑑み、秋季俳句大会を記念大会にすることにつき長谷川・佐々木両副会長から提案あり、具体的に検討することとなつた。（総務部）

五、新年度の会員数は若干減少する見込み。（総務部）

理事会日程 5／8 6／12

定期総会 4／24

（毎月第二木曜日 けやき15時より）

伊藤はる子 抄出

駆けて来る紅い頬つべの冬帽子

脱ぎ捨てし子のセーターの日の匂い

メモといふ命令書もて歳の市

初春や良きも悪しきも聞き流す

目も耳も一塊まりや福笑

どこかしらその人に似る福笑

トンネルの上の茶畠夕笛子

駅ビルの小さき本屋春隣

日脚伸ぶゆるゆる脱皮してみよか

冬の海見ゆる高さに墓標立つ

北村文江 抄出

悔一つ消し去る風や古曆

山水の跳び散つてゐる草氷柱

冬用意母には重き灯油缶

眠る山然れど木魂の返る山

ノーベル平和賞山茶花は咲き継ぐ

初夢や白蛇願えど現われず

スケジュール一人に重し千六本

蓑虫や自家葉籠の陀羅尼助

冬晴れの庭師の手際見て飽かず

肥後ちさこ

齊藤 静治

加藤 健治

松良 繁美

田中 恵一

武居裕美子

芹澤 常子

鳥海 壮六

田中 幸子

加藤まり子

足立 和子

植松テル子

和田恵美子

尾崎 一夫

加藤かほる

廣田 悅子

小林永以子

小島ノブヨシ

池田 令子

杉崎 せつ

令和六年度年間ベスト一句集鑑賞

(一句鑑賞のほか二句抄出)

底力見せると啖呵受験の子 青木 孝子

この句の受験生は受験に対し確固たる気構えを持つていて頼もしく思うと同時に、高校での進路指導のことが蘇ってきました。

受験校は本人の志望と各種のデータに基づいて三者面談で決めます。生徒の将来を決める重要な決定ですから神経を使いました。

教職経験の浅い頃、思うように合格しないために出来をためらう気持ちになつたこともあります。その教え子も古希を過ぎました。

父の日や老いてなほ似るその仕種 下萌や日向へびんと山羊の紐 高井 幸子
田下 昌人

(加藤健治)

立冬の小石をはじく鍬仕事

久保寺トミ子

一瞬の出来事にためらいもなく続く鍬仕事、冬空の乾いた空気にはじかれた小石が目の前に飛んで来る様子がうかがえます。厄介物の小石を一句にまとめるのは、常に畠仕事をしているところから生まれるものですね。

立冬の中、もくもくと働く姿にエールを送ります。虫に野を返して今日の足洗う 市川めぐみ

備長炭叩けば山の木靈かな

(加藤まり子)

狂おうぞなお狂おうぞ夏祭

佐々木重満

インパクトのある男臭い句です。昔、行つた青森の伝武多祭を思い出しました。大太鼓の音が胸にどかどか響き、血湧き肉躍るとはこのことかと思いました。睡魔を払うという土着の塊を搖さ振る大太鼓の音に、跳人といつしょに跳ねたいほどでした。昔、職場の大先輩が「男を放棄した訳ではない」と宣つた事が今ならよく分かります。

これから夜這いに行くのではないでしようが。
手に碎く土の温もり遠蛙 古屋 徳男

花吹雪もつたいなくて幸せで 二見 和江

(川本育子)

空蟬の爪のくい込む葉裏かな

中村 裕子

幼い頃、蟬の殻を集めていた時、中々はがせなくて、やつととれたとおもつたら足が挽げてしまつたりしました。まさに爪がくい込んでいたのだつた。

この句の「爪のくい込む」と表現されたことによつて、生物の命をつなぐ生き様が見えてきた。蟬の一生の長い地下での歳月、そして地上での僅かな時間の運命を自覺して、強い覚悟を爪をくい込むで役目を果たしているを、あつぱれと讀んでいる。

能登大隆起海女が海を探してゐる

人生の幾山河をなめくじら

岡本 史郎

佐藤 正子

万物の目覚めの序章二月光

加藤 春江

田畠ヒロ子
(小林永以子)

備長炭叩けば山の木靈かな
卯の花や声透き通る雨上がり

出澤 洋子
(芹澤常子)

二月はまだ寒さが厳しく木の芽も固く、春とは言い難いのではあるが、よく見ると冬とは違うかすかな光

の明るさを感じ、はつとする事がある。そんな感覚を「目覚めの序章」と促えた。序章から三月四月とクリッシャンドされ正に風光る春爛漫を迎えるのである。人間を含め自然物が心待ちする「春」を二月光という季語に託し、思いのこもつた共感できる佳句に昇華されました。

夙やさらはれて行く街の色

森田 久江

肥後ちさこ

海原に月光といふ銀の帶

(関戸わよこ)

広辞苑閉ぢる響きも夜の秋

青木たけを

新井たか志
(中村裕子)

昼はまだ暑いが、夜になつて秋の気配を感じる頃に

なると毎年古今集、藤原敏行の「秋来ぬ」と思い出す。

句作だろうか、机に対する作者が思われ、良い言葉を得られただろうと「広辞苑」により想像する。一息衝く作者に微かな音も耳に心地よい。係助詞「も」が掲句では効いており、早くも鳴き出した虫の声なども

連想される。移りゆく季節を豊かな心持で迎えられる作者が描かれた。

春はまーるく三角四角きようなら

伊藤 道郎

春は「まーるく」すばらしい表現だと思いました。

鶯の声、朧月、新入生の子供達の笑顔等々数えきれない程の「まーるい」春が浮かんで来ます。「まーるい」と言う形と平仮名つづりの柔らかさから春のイメージが無限に膨らんで来ます。亦三角や四角の角ばかりが丸を一層引立ててゐるように思いました。このような表現が句のイメージに深みを与えてくれる様に思い感銘しました。

探梅や言葉少なに戻りたる

池田 忠山

新井たか志
(中村裕子)

補聴器を外して長き夜を独り

長谷川きよ志

補聴器を外すのですから、そろそろ就寝の時間でしょか、なのに夜が長いとは。秋の夜長とはいえ、よく聞こえないままの時間は、さらに長いものだと言つてゐるのだと思います。また、家族が何で笑つてゐる

のか聞こえない時などは、「独り」を感じてしまうかも知れません。加齢は残酷に私達の身体のいろいろな機能を低下させます。それに向き合つて生きている一句と思いました。

柿ひとつ残され庭が軽くなる
水切りの石は戻らず卒業す

小澤 純子
庄司 下載

(二)見和江)

ふるさとを雁字搦めに薦紅葉

小林永以子
庄司 下載

一にも二にも「雁字搦め」の美しさに擊たれた。この漢字表記があつてこそ際立つ薦紅葉の存在。

さて、ふるさとはいつたい何なんだろう、どんなところをいうのだろうかと改めて思う。雁字搦めにするのは薦紅葉ばかりではない。そこに生きる人も出て行つた人も、大きくはふるさとを雁字搦めにし、またされているのだ。ひよつとして、切つても切れぬ砦のようなどころなのかも知れない。

集合は銀座ライオンパナマ帽
なんとなく春のポケット裏返す

池田 令子
(寶子山京子)
杉山あけみ

ハンモック悪の限りを考える

佃 悅夫

風が通る涼し気な木陰に吊るしたハンモックに寝そべる人。安らかなひとときを過ごしていると見えて、

頭の中ではとんでもないことを考えている。無意識に浮かんでくる想念は制御不能だが、作者は意識して「悪い限り」を考えているようだ。

平和な情景と人の内面の複雑さを対比させ日常に潜む危うさを表現されたのか、思考は自由だよと笑つておられるのか。

水切りの石は戻らず卒業す
木登りの少年を見ず鳥雲に
村場 十五

庄司 下載
(星 一義)

春はまーるく三角四角さようなら

伊藤 道郎

俳諧味のある句として興味を引いた。

人は後期高齢者は特に四肢の衰えを明確に感じる。そんな中、冬の寒さに対して耐え得る肉体、心が鈍つてくる。そのことを冬は三角四角の角と強調しているのではないか。この角が内面的感情まで微妙に語つているようで面白い。

そして、春、「まーるく」と角のない円を出すことで、春が来たことの安堵を示している。心象の微妙さを感じた。

愚図る子や渡稜草の軸まつ赤
春兆す五指の動きの軽きかな

須田 聰子
(田畠ヒロ子)
高橋みどり

俳句おだわら（3・19〆切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（2・21）

久江報

菰巻を外す青空水温む

祭神は橘媛よ春淡し

春寒や手のぬくみ合ひ睦み合ふ

小流れに舞ひたる梅花二・三片

菜の花の空を謳ふや青い空

踏の臺の眠り覚ますや心字池

◆香雨・梅ごち（2・23）

忠山報

子の顔にどこか似てゐる紙ひひな

雛飾るひと間あれこれ片づけて

嫁ぐ日の事とつおいつ雛納め

雲間より薄日のもるる雨水かな

春寒やかたまりとかぬ濠の鳥

おりがみの器に分けて雛あられ

照る日より曇る日匂ふ梅の花

雛市を出でてほてりのさめやらず

◆こよろぎ（2・21）

つとむ報

春めくや胎動告ぐる娘の笑顔

鍵盤の音色やさしき春夕べ

山寺の弥陀と春光頌ちけり
唐鍬の楔をしむる雨水かな

◆山北（2・27）

由里子報

歩くこと日課の一つ日脚伸び

リハビリの自転車こぎや春の風

ピカチューに海見せに行く春日かな

着信の振動かすか山火燃ゆ

麗かや黒豆煮るに釘探す

◆沈丁（3・6）

寶子山報

水温む我影向こう土手をゆく

啓蟄や友と遠出の赤い靴

杖つかず歩ける日々よ水温む

頬摺の稚の匂ひや水温む

杖つかず歩ける日々よ水温む

菜の花の中で華やぐ立話

麗らかや犬小屋くぐる土竜塚

縁側の温もり集め桜餅

春耕の土へ幼虫戻しけり

あぜ道の横一列に春迫る

風とまり湖面キラキラ水温む

雲重く頬叩く風淵温む

富士の水しみわたる土わらび採り

植松テル子
神山つとむ

高杉掘三朗
大澤 紀子

足立 和子
川本 育子
高橋 小糸

山崎 悅子
湯浅 義幸
近藤 久江

石田加津子
竹下由里子

吉田 百代
門松 凤文
吉田 康雄
陌間みどり

勝木 澄子
河本 純子
菅野 英余
高井 幸子

若村 京子
柳澤ミサ子
田中 恵一
河本 純子

片野 節子
峯尾ユキエ
清水美代子
松下 俊之
武居裕美子

陽炎や神代の恋はおほらかに
土手際のつくし芽をだす散歩道
ウクレレのドレミ縛れて春の宵
水温むカラス真面目に鳴いてゐる

◆春野（2・16）

森田 久江
川瀬 芳子
鈴木 洋子
竇子山京子

甘き香を通す浦風掛大根

秋山 昇
伊藤はる子

断捨離のひとつに母の雛かな
デカンターの底の濁りや二月尽

内田知江子

蛇穴をいでて前世を探るかに

尾崎 一夫

大根引く乳房ふたつが邪魔になる
ジヤンパー世代ジャージー世代ジヤズ好む

瀬戸 悠

先生へ薄氷掲げ走りたる

二見 和江

長谷川きよ志

幸子報

◆青梅（3・12）

初燕孫は数字をおぼえけり

大塚 行人

花粉症裸電球ぼやけをり

湯本とし子

受験了ふ家中の糸解れけり

加藤まり子

犬ふぐりぶらり畔径三時かな

久保寺トミ子

爺ちゃんのゆづりの鎌鉄水温む

田中 幸子

◆みなみ（2・15）

かほる報

手入れせぬ枝は八方梅の花

柳川 紀枝

外に出ればあの道この道犬ふぐり

加藤 富江

幼子の丈に屈みて犬ふぐり
鶏小屋は声の増堀や犬ふぐり

加藤れい子
加藤 健治

地中から内緒話の春の音

市川めぐみ
豊田 幸枝

寒月や湯気に包まれ牛生まる
袖通す姉の御下がり春裕

齊藤 静
小瀬村信子
加藤かほる

早春の川キラキラと流れゆく
不明者の放送今日も凍返る

きよ子報

◆おほゐ（3・12）

証書手に晴れ着の娘らや花ミモザ

原 仁子

ときめきを心に秘めて春の旅

松良 繁美

はらはらと花びらのごと春の雪

安池 利枝

長閑なり真木の生け垣続く道

二上 光子

長閑さや欠伸連鎖の三人目

横塚 昌平

チャイム鳴り居留守をつかう目借り時

石井千代子

蕗の薹一つ喋れば又一つ

小野 菊士

雨音と共にひと夜の目借時

香川 花子

花の山流れる雲も立ち止まる

加藤 春江

梅の香をすり抜けてくる谷戸のバス

瀬戸とみ子

山火事の消火術なく祈雨の春

高橋みどり

おしゃべりな風とたわむる沈丁花

中根登美子

中村 昌男

娘雛還暦近く艶を増し

春の風リタルダンドに歩む径
大会の明けて良き朝初音かな

◆零（3・20）

羽田発の北の旅かな鳥曇

啓蟄の派出所日誌「ノラ一匹」

青饅は母の手作り好きな味

真正直な香りして黄水仙

寄り入れ替り春暁の番い鳥

古家具に心癒やされ春火鉢

青ぬたの酢の塩梅にハートマーク

少子化や素知らぬふりの大ふぐり

◆鷹（3・7）

獵祭や野球カードの今昔

否応のなくて受診よ汎え返る

応接間いま起居の間や豆を撒く

菜の花や白波の海眼下にす

春暁のフルーツパーティー港見ゆ

田楽に味噌たっぷりと道の駅

ぽつねんと関守石や散椿

橋桁に名工の名や跡のたう

中津川晴江

廣田 悅子

石井きよ子

史郎報

青木たけを

伊藤 道郎

川合 昌子

佐藤 正子

中村 裕子

のがわきいち

本多登美子

岡本 史郎

十五報

池田 令子

西賀 久實

佐宗 欣二

中田 笑子

山崎美知子

石川 州洋

瀬戸 下載

絵手紙教室竹笊のふきのたう
蕗の芽や日の目まきこむ堰の水
畠皺伸ばすアイロン春裕
綿虫に昼を翳りし汀かな
友逝きて冬青空の目に痛し
暮れ残る濠のさざなみ浮寝鳥
海沿ひの竿に干したる若布かな
春の雪踏んで金時山頂へ
トンネルを抜けて古里遅桜
淡水に跳ねる蝶鮫日脚伸ぶ
時流れ今老獏や梅早し
湯通しに若布色増すゆふべかな
ままごとの母役は妹桃の花
夜桜や夫家苞に握り鮎
友見舞ふつくしの束にリボンかけ
俎板に葱の白さや汎返る
春風に初出版を祝いけり
墓仕舞追善供養白椿
鳥雲に入るや宿り木緑濃し
タブレットに済ます記名や花曇

高橋久美子

中山智津子

齊藤 桂

芹澤 常子

深澤 一華

松岡美和子

加藤 幾代

高橋千代子

守屋 まち

米山 翠

來田 新子

大島美恵子

青山 典仁

大沢 年子

小林 環

滝谷 明子

下平 美子

鳥海 壮六

古屋 徳男

村場 十五

◆草むら（3・19）

重満報

犀星のあの詩を想う彼岸かな

石井 秀稀

シーソーが黙つて見つむ春の雪

佃 悅夫

こゆるぎの浜に流すや春愁

佐々木重満

◆実のり（3・19）

たか志報

雛納めかすかに聞こゆオルゴール

荒井ちゑ子

古雛や八十余年束の間に

岩本ひさみ

白ねこのひよいと手を出す雛あられ

杉本 久子

ひたひたと寄する波音雛の夜

木村 幸枝

ゆらゆらと男に遠き雛の灯

新井たか志

◆無所属

ぐんぐんと桜の木末息あらく

小林永以子

弔ひにきて海しづか寒夕焼

畠 梅乃

寒明けのクレーン空をまさぐりし

北村 文江

枇杷の花昨日と同じひと日過ぐ

一ノ瀬茂代

豆撒きの大声出せば身の軽く

出澤 洋子

きさらぎや哲学的餡パンの季節

大石 雄介

暗黒やオキナワアシナガチビゴミムシ

大石 和子

にんにくと植物発酵エキスかな

瀬戸 正洋

春の雲一番搾りの句に逢いたい

小澤 園子

有がまま長屋の花見無いがまま

山本 すみ

配達人薔薇と笑顔を両手より
パイプ椅子残る寒さの会議室

岩橋恵津子

豪雪やあなたの全て光りをり
道問ふも皆インバウンド山笑ふ

山田 照子

大佐田うづき
終活の話やんわり春炬燵

大佐田うづき

杉山あけみ
いつだつて気まぐれ斑入り椿落つ

田畠ヒロ子

須田 聰子
閉館の蔵書は眠る涅槃西風

須田 聰子

小島ノブヨシ
指切拳万赤鉛筆は折れやすい

岡田 典代

草餅や化粧の母の恐ろしき
かけ足で通り過ぎる児露のとう

杉崎 せつ

心をも濡らすのである。

池田 忠山

ほうたるへもはやどの手もとどかざる

勝木 澄子

名残りを惜しみ伸ばした指先に触れもせず、螢は決

佃 悅夫

然と天に帰るのであろうか。作者は向後夜毎に空を仰

ハンモック悪の限りを考える

ぎ師の星を搜すのであろう。哀切な思慕の情は読者の

横塚昌平

第十四回おおいゆめの里俳句大会

三月八日、於大井町そうわ会館。兼題は「朧」
「董」(傍題可)で投句二七六組。当日席題は春季雑詠、
「桜」。参加者四五名

兼題入賞作品

大井町長賞

分校の十二の手形すみれ草

大井町議会議長賞

すみれ咲く大地は嘗爆心地

大井町教育委員会教育長賞

董咲く能登のがれきの隙間にも

大井町文団連会会长賞

朧夜の静かに寝付く遊具たち

(以下高点順)

身は風となりて董の野に遊ぶ

書き出せば遺書めく日記夕朧

朧夜や懐紙にはさむ胸の内

手紙には書けぬ本心月朧

野に董アウシユビツツに子供靴

悪女とも夜叉ともなれず夜の朧

朧の夜素数へ一を足してみる

手を引きて知らず引かれて行くおぼろ

すみれ草校舎の隅に海の色

登校の列ある平和すみれ咲く
物置に昔の時間月朧

席題入賞作品 (一位から二十位まで高点順)

荒 理依子

清水 吞舟
鈴木 幸子
中根登美子
加藤かほる

西岡 青波
大山 道子
田畠ヒロ子
近藤 久江
長谷川昭放
伊藤ゆかり
尾崎 竹詩
新井たか志
百武 尚美
安池 利枝
小野 菊士
二上 光子
加藤かほる
飯田美枝子
松田ます子

小瀬村信子

夜通しの煮炊きなつかし数へ日よ

西賀久實

この句を読んで義母と過ごした日々を、ふと思い出しました。私は長男に嫁きましたので、正月二日にはお年始で親戚の方が大勢見えられました。八畳間の奥座敷だけでは座りきれず、十畳の部屋にもテーブルを出して、三つのテーブルに御馳走を並べて皆で楽しい一時をすごしました。このような思い出を昨日のことのようになつかしく思い出させてもらいました。

田中恵一

初詣神に転がる五円玉

中津川晴江

小さいお子さんが賽銭を投げ入れました。お参り

の際その光景を見てこの句になつたのでしょうか。句の縁とは不思議なものです。出掛けるとさまざまな景色と人達に出会います。土地や場所によつて人情はそれぞれ異なりますが、出会えたこと、そしてそこで得られた心情が句作に生かされています。五円玉を発見したことによって今年一年さまざまご縁に恵まれることでしょう。

☆合同句集13集寄贈先☆

(公的機関) 小田原市(市長、文化政策課、生涯学習センター)けやき、中央図書館、川東タウンセンター・マロニエ、国府津学習館、城北タウンセンターいづみ、尊徳記念館) 小田原市観光協会、小田原箱根商工会議所、南足柄市図書館、南足柄市女性センター、大井町図書館、松田町文化センター、山北町中央図書館、まなづる図書館、湯河原町図書館、開成町教育課、国立国会図書館
(マスコミ) 神奈川新聞本社、神奈川新聞小田原支局、神静民報社、タウンニュース社
(文学・俳句) 日本近代文学館、日本現代詩歌文学館、俳人協会、現代俳句協会、日本伝統俳句協会、角川「俳句」編集部、毎日新聞「俳句&あるふあ」編集部、文学の森「俳句界」編集部、東京四季出版「俳句四季」編集部、本阿弥書店「俳壇」編集部
(高等学校) 小田原、小田原東、小田原城北工業、西湖、足柄、大井、山北、吉田島総合、相洋、旭丘、立花、函嶺白百合学園

◆この他に寄贈したい先、新会員にお誘いしたい方があれば提供致しますので遠慮無くお申し出ください。

申込先…山田照子

☎〇四六五(三四)六五四二